

あさふますらむ
そのくさふかの

1

しほもかなひぬ
いまはこぎいでな

2

のもりはみずや
きみがそでふる

3

よしのよくみよ
よきひとよくみつ

4

みやこをとほみ
いたづらにふく

5

たまきはる
宇智の大野に
馬並めて
朝踏ますらむ
その草深野

間人老
卷一四

1

熱田津に
船乗りせむと
月待てば
潮もかなひぬ
今は漕ぎ出でな

額田王
卷一八

2

あかねさす
紫野行き
標野行き
野守は見ずや
君が袖振る

額田王
卷一一〇

3

よき人の
よしとよく見て
よしと言ひし
吉野よく見よ
よき人よく見つ

天武天皇
卷一一七

4

采女の
袖吹きかへす
明日香風
都を遠み
いたづらに吹く

志貴皇子
卷一一五

5

みつつしのはな

こせのはるのを

えかてにすといふ
やすみこえたり

わがたらぬれし
やまのしづくに

まさきくあらば
またかへりみむ

いもをもとめむ
やまがしらずも

巨勢山の
つらつら椿

つらつらに

見つつ思はな

巨勢の春野を

坂門人足

卷一―五四

われはもや
安見児得たり
皆人の
得難にすといふ
安見児得たり

藤原鎌足

卷二―九五

あしひきの
山のしづくに
妹待つと
わが立ち濡れし
山のしづくに

大津皇子

卷二―〇七

磐代の
浜松が枝を
引き結び
真幸くあらば
また還り見む

有間皇子

卷二―一四一

秋山の
黄葉を茂み
迷ひぬる
妹を求めむ
山道知らずも

柿本人麻呂

卷二―二〇八

こころもしのに
いにしへおもほゆ

11

ふじのたかねに
ゆきはふりける

12

にほふがごとく
いまさかりなり

13

ならのみやこそ
おもほすやきみ

14

にごれるさけを
のむべくあるらし

15

淡海あかいみの海うみ
夕波ゆふなみ千鳥ちどり
汝なが鳴なけば
情こころもしのに
古いにしへ思おもほゆ

柿かき本人もの麻呂まろ
卷三―二六六

11

田見たごの浦うらゆ
うち出いでて見みれば

真白ましろにそ
不尽ふじの高嶺たかねに
雪ゆきは降ふりける

山部やまべ赤人あかひと
卷三―三二八

12

あをによし
寧楽なよろの京師みやこは
咲さく花はなの
薰にほふがごとく
今盛いまさかりなり

小野老おののおゆ
卷三―三二八

13

藤波ふぢなみの
花はなは盛さかりに
なりなりにけり
平城なごらの京みやこを
思おもほすや君きみ

大伴おほとも四綱よつな
卷三―三三〇

14

験しるしなき
物ものを思おもはずは
一坏ひとつぎの
濁にごれる酒さけを
飲のむべくあるらし

大伴おほとも旅人たびと
卷三―三三八

15

このてるつきは
みらかけしける

16

こころはもへど
ただにあはぬかも

17

きみにわがこふる
こころしめさね

18

ならのみやこに
ゆきてこむため

19

なきていぬなる
うめがしづえに

20

世間は
空しきものと
あらむとそ
この照る月は
満ち開けしける

作者未詳
巻三―四四二

16

み熊野の
浦の浜木綿
百重なす
心は思へど
直に逢はぬかも

柿本人麻呂
巻四―四九六

17

にほ鳥の
潜く池水
情あらば
君にわが恋ふる
情示さね

おわたものさかのうえのいらつめ
大伴坂上郎女
巻四―七二五

18

龍の馬も
今も得てしか
あをによし
奈良の都に
行きて来む為

おわたものたびと
大伴旅人
巻五―八〇六

19

春されば
木末隠れて
鶯そ
鳴きて去ぬなる
梅が下枝に

やまぐちのわかまる
山口若麻呂
巻五―八二七

20

きよきかはらに
らどりしばなく

21

うにしもあれや
いへおもはざらむ

22

てれるつくよの
みればかなしさ

23

ひとのまよびき
おもほゆるかも

24

ほしのはやしに
こぎかくるみゆ

25

ぬばたまの
夜の更けぬれば
久木生ふる
清き川原に
千鳥しば鳴く

山部赤人
巻六一九二五

21

玉藻刈る
辛荷の島に
島廻する
鶺鴒にしもあれや
家思はざらむ

山部赤人
巻六一九四三

22

ぬばたまの
夜霧の立ちて
おほほしく
照れる月夜の
見れば悲しさ

大伴坂上郎女
巻六一九八二

23

振仰けて
若月見れば
一目見し
人の眉引
思ほゆるかも

大伴家持
巻六一九九四

24

天の海に
雲の波立ち
月の船
星の林に
漕ぎ隠る見ゆ

柿本人麻呂歌集
巻七一〇六八

25

ひかりすくなき
よはふけにつつ

26

ゆつきがたけに
くもたらわたる

27

もえいづるはるに
なりにけるかも

28

かきかぞふれば
ななくさのはな

29

なくなるとしかの
こゑのはるけさ

30

海原の
道遠みかも

月読の

光すくなき

夜は更けにつつ

作者未詳

巻七一〇七五

26

あしひきの
山川の瀬の
響るなへに
弓月が嶽に
雲立ち渡る

柿本人麻呂歌集

巻七一〇八八

27

石ばしる
垂水の上の
さ蕨の
萌え出づる春に
なりにけるかも

志貴皇子

巻八一四一八

28

秋の野に
咲きたる花を
指折り
かき数ふれば
七種の花

山上憶良

巻八一五三七

29

秋萩の

散りのまがひに

呼び立てて

鳴くなる鹿の

声の遙けさ

湯原王

巻八一五五〇

30

おくこのにはに
こほろぎなくも

31

けふふるあめに
ちりかすぎなむ

32

うかびゆくらむ
やまがはのせに

33

うめをかざして
ここにつどへる

34

たちてもぬても
いもをしそおもふ

35

夕月夜
心もしのに
白露の
置くこの庭に
蟋蟀鳴くも

湯原王
卷八一五五二

31

明日香川
行き廻る丘の
秋萩は
今日降る雨に
散りか過ぎなむ

丹比国人
卷八一五五七

32

あしひきの
山の黄葉
今夜もか
浮びゆくらむ
山川の瀬に

大伴書持
卷八一五八七

33

ももしきの
大宮人は
暇あれや
梅を挿頭して
ここに集へる

作者未詳
卷八一八八三

34

春楊
葛城山に
たつ雲の
立ちても坐ても
妹をしそ思ふ

柿本人麻呂歌集
卷十一二四五三

35

きみをいはねば

おもひそわがする

36

斑鳩いかるがの

因可よるかの池いけの

宜よろしくも

君きみを言いはねば

思おもひそわがする

作者未詳さくしゃみしやう

卷十二一三〇二〇

36

きみにこふるも

わがこころから

37

わが情こころ

焼やくもわれなり

愛はしきやし

君きみに恋こふるも

わが心こころから

作者未詳さくしゃみしやう

卷十三一三二七一

37

かなしきころが

にのほさるかも

38

筑波嶺つくはに

雪ゆきかも降ふらる

否いなをかも

かなしき児ころが

布ぬい乾ほさるかも

東歌・常陸国あずまうた ひたちのくに

卷十四一三三五一

38

われによすとふ

ままのてこなを

39

葛飾かつしかの

真間ままの手児てこ奈なを

まことかも

われに寄よすとふ

真間ままの手児てこ奈なを

東歌・下総国あずまうた しもつけのくに

卷十四一三三八四

39

きみしふみてば

たまといろはむ

40

信濃しなのなる

千曲ちくまの川かはの

細石さざれしも

君きみし踏ふみてば

玉たまと拾ひろはむ

東歌・信濃国あずまうた しなののくに

卷十四一三四〇〇

40

まぐはしころは
たがけかもたむ

41

あれはいたらむ
ねどなさりそね

42

あがたらなげく
いきとしりませ

43

みらのくやまに
くがねはなさく

44

したでるみちに
いでたつをとめ

45

下野しもつけの
三義みかちの山やまの
小櫓こやぐらのす
ま妙まげし児ころは
誰たが笥けか持もたむ
東歌あすまうた・下野国しもつけのくに
卷十四ー三四二四

41

安達あだ太良たらの
嶺ねに臥ふす鹿猪ししの
ありつつも
吾あれは到いたらむ
寢処ねどころな去さりそね
東歌あすまうた・陸奥国みちのくに
卷十四ー三四二八

42

君きみが行ゆく
海辺うみへの宿やどに
霧立きりたたば
吾あが立たち嘆なげく
息いきと知しりませ
作者未詳さくしやみしやう
卷十五ー三五八〇

43

天皇すめろぎの
御代みよ栄さかえむと
東あづまなる
陸奥山みちのくやまに
黄金花くがねはな咲さく
東歌あすまうた・大伴家持おおとものやかもち
卷十八ー四〇九七

44

春はるの苑その
紅くれなゐにほふ
桃ももの花はな
下照したでる道みちに
出いで立たつ少女をとめ
東歌あすまうた・大伴家持おおとものやかもち
卷十九ー四一三九

45

あさこぎしつ
うたふふなびと

からくにへやる
いはへかみたら

このゆふかげに
うぐひすなくも

こころかなしも
ひとりしおもへば

てりてたてるは
はしきたがつま

朝床に
聞けば遙けし
射水川
朝漕ぎしつ
歌ふ船人

大伴家持
卷十九一四一五〇

大船に
真楫繁貫き
この吾子を
韓国へ遣る
斎へ神たち

光明皇后
卷十九一四二四〇

春の野に
霞たなびき
うら悲し
この夕かげに
鶯鳴くも

大伴家持
卷十九一四二九〇

うらうらに
照れる春日に
雲雀あがり
情悲しも
ひとりしおもへば

大伴家持
卷十九一四二九二

見渡せば
向つ峰の上の
花にほひ
照りて立てるは
愛しき誰が妻

大伴家持
卷二十一四三九七